

# 神話研究における『粟鹿<sup>大明神</sup>元記』の史料価値

——「神」概念の形成と出雲神話を中心に——

前之園 亮 一

日本神話の研究は、さまざまな文献や資料を活用していろいろな学問分野の立場から幾多の優れた研究が発表されておき、とりわけ文化人類学・比較神話学からの研究はめざましく、祭儀的方面からの研究も大きな成果をあげている。こうした現状に対して文献史学からの研究はやや影が薄いように感じられるが、小稿では戦後に発見され、是沢恭三・田中卓爾大家によって紹介研究された『粟鹿大明神元記』『粟鹿大神元記』という文献が、神話研究において『古事記』『日本書紀』『風土記』などの主要文献と同等に、広く活用されるべき貴重な史料であることを強調し、「神」概念の発達や山岐大蛇退治神話・素佐乃乎命神裔譜の形成について少しばかり考えてみたい。

## 一 『元記』の体裁・内容と研究史

『粟鹿大明神元記』と『粟鹿大神元記』は但馬国朝来郡粟鹿<sup>あわが</sup>神社の祭神の神系譜と国造神部<sup>みくづ</sup>氏の系譜を記し、『古事記』撰録よりも古い「和銅元年八月十三日」の年紀を有する注目すべき史料であり、現在は宮内庁書陵部に架蔵されている。『粟鹿大明神元記』は九条家文書の中に発見された鎌倉から室町初期頃の写しであり（以下、九

条家本『元記』と呼称する）、『粟鹿大神元記』は明治四十年に谷森善臣翁が田中教忠氏所蔵の「古巻」（現在所在不明）を書写して袋綴一冊に作ったもので（以下、谷森本『元記』と呼称する）、いずれも原本ではないけれども、一見して原本の古さが推測され、数々の興味深い記述を満載した希代の古記録である。

この二種類の『元記』は是沢恭三氏によって戦後初めて世に紹介され、その全文はすでに是沢氏と田中卓氏が後述の論文のなかで紹介されているのであるが、今一度、谷森本『元記』の全文と九条家本『元記』の一部を左に掲出する。なお谷森本『元記』と九条家本『元記』の記事内容は大同小異ではほとんど違いはないが、記載様式において九条家本は大部分が豎系図となっていて、本研究年報のような洋装本に掲出するのにはやや不便であり、また紙数の制約もあって全文を紹介できないのは残念であるが、是沢氏の論文に全文とその写真版がおさめてあるので参照していただきたい。

さて、谷森本『元記』は袋綴一冊、本文十一枚、一面十行、一行二十六字詰、別に奥書一枚。表紙題箋に「粟鹿大神元記和同元年八月十三日」、表紙裏に「延喜式神名下但馬国朝来郡粟鹿神社名神大」とあり、本文は左記のとおりである。

但馬国朝来郡粟鹿大神元記

新羅將軍正六位上神部直根閑謹言

依<sup>ニ</sup>勅宣旨<sup>一</sup>勘注言上、但馬国鎮守阿米美佐利命、粟鹿大神元記、

神祖伊佐那伎命与<sup>ニ</sup>妹伊佐那美命<sup>一</sup>二神相生之見、

合参神、

大日神

次月神

次素佐乃乎命

此素佐乃乎命登<sub>レ</sub>天、從<sub>レ</sub>天降來<sub>ニ</sub>於出雲樋川上鳥上山、娶<sub>ニ</sub>伊那多美夜奴斯名須佐能夜都美弥之女久斯伊那多比弥<sub>一</sub>生兒、蘇我能由夜麻奴斯弥那佐牟留比古夜斯麻斯奴、娶<sub>ニ</sub>大山都美之女木花知利比売<sub>一</sub>生兒、布波能母知汗那須奴、娶<sub>ニ</sub>淤迦美之女日河比売<sub>一</sub>生兒、深渊之水夜礼花、娶<sub>ニ</sub>阿麻乃都刀閭乃知尼<sub>一</sub>生兒、意弥都奴、娶<sub>ニ</sub>布努都弥美之女布豆弥美<sub>一</sub>生兒、天布由伎奴、娶<sub>ニ</sub>佐志久斯布刀比売之女佐志久斯和可比奴売<sub>一</sub>生兒、大国主命、一名大物主命、亦名意富阿那母知命、亦名葦原色衰命、亦名八千梓命、亦名宇都志国玉命、亦名幸術魂群代主命、亦名八嶋男命、娶<sub>ニ</sub>天止牟移比売<sub>一</sub>生兒、阿弥弥佐利命<sub>坐<sub>ニ</sub>粟鹿太社<sub>一</sub></sub>、又娶<sub>ニ</sub>三嶋溝杭耳之女玉櫛姫<sub>一</sub>生兒、溝杭矢瀨姫蹈躰五十鈴姫命、嫁<sub>ニ</sub>神倭伊波礼毘古天皇<sub>一</sub>生<sub>ニ</sub>神沼河耳天皇并皇子<sub>一</sub>、次五十鈴依姫命、嫁<sub>ニ</sub>神沼河耳天皇<sub>一</sub>生<sub>ニ</sub>磯城津彦玉手看天皇<sub>一</sub>、又娶<sub>ニ</sub>溝杭耳之孫女活玉依姫<sub>一</sub>生兒、久斯比賀多命、大神朝臣祖也、自<sub>ニ</sub>神倭伊波礼毘古天皇御世<sub>一</sub>始而至<sub>ニ</sub>神沼河耳天皇御世<sub>一</sub>為<sub>ニ</sub>内臣<sub>一</sub>國權日、賜墓地、在<sub>ニ</sub>泉國知努乎曾村<sub>一</sub>、

右大国主神、既雖<sub>レ</sub>生<sub>ニ</sub>兩兒<sub>一</sub>猶未<sub>レ</sub>明<sub>ニ</sub>其貌<sub>一</sub>、夜之曙乃去、曾昼不<sub>ニ</sub>往来<sub>一</sub>、於是玉櫛姫、心中懷疑、統<sub>ニ</sub>綜絲衣<sub>一</sub>、至<sub>ニ</sub>明漸尋、隨<sub>ニ</sub>綸追覓之時<sub>一</sub>、其綸經<sub>ニ</sub>於茅渟陶村<sub>一</sub>、從<sub>ニ</sub>彼處<sub>一</sub>直指<sub>ニ</sub>大倭御諸嶽<sub>一</sub>、玉櫛姫乃知<sub>ニ</sub>大神<sub>一</sub>、然其綸遺<sub>ニ</sub>留本所<sub>一</sub>、唯有<sub>ニ</sub>三廻<sub>一</sub>、因<sub>ニ</sub>斯号<sub>一</sub>意富美和君姓<sub>一</sub>也、

此久斯比賀多命、娶<sub>ニ</sub>宇治夜須姫命<sub>一</sub>生兒、阿麻能比賀太命、妹渟中底仲姫命、嫁<sub>ニ</sub>片塩浮穴宮御宇磯城津彦玉手看天皇<sub>一</sub>生<sub>ニ</sub>息石耳命<sub>一</sub>、次大日本彦須支侶天皇、次常根津彦某兄命、次磯城津彦命、

又大和氏文付在名、太祁知遲若命、

阿麻能比賀太命娶<sub>ニ</sub>意富多弊良姫命<sub>一</sub>兒櫛<sub>（ミヅノ）</sub>毘戸忍速栖浦浦稚日命、兒櫛<sub>（ミヅノ）</sub>毘戸忍勝速日命、

又大和氏文在名、太祁弥賀乃保命、

櫛毬戸忍勝速日命兒多祁伊比賀都命、亦名武毬曾々利命、母曰日向賀牟度美良姬命、

又大和氏文在名、阿太賀多須命、此者和爾公并石辺公等祖、

次伊比加多須命、

多祁伊賀都命兒耶美賀乃許理命、亦名武毬折命、母曰出雲臣上祖沙麻奈姬命、

耶美賀乃許理命兒宇麻志毛呂尼命、亦名櫛毬凝命、母曰丹波道主王女子夜知矩大知姬命、

宇麻志毛呂尼命兒刀余美氣主命、亦名云飯片隅命、母曰伊勢幡主命女子賀具侶姬命、

刀余美氣主命兒意保美氣主命、亦名云神田根子命、母曰木国奈具佐彥命女子大姬命、

意保美氣主命兒大田々称古命、母曰賀毛都美良姬命、此大神朝臣等上祖矣、

右大田々称古命、磯城瑞籬宮御宇食国所知御間城入彥五十瓊殖天皇御世所求出来、乃鎮祭大物主大神之祖也矣、

一書云、同御宇五戊子年、国内疫病、人民死亡者且大半矣、百姓流離、或有背叛、於是、天皇乃幸于神浅茅原、

而会八百萬神、以下問之時、神、輕境原宮御宇大日本根古彦国牽天皇第一皇女託於倭迹跡日百襲姬命曰、天皇何

憂國之不<sub>レ</sub>治也、若敬祭我者、必当自平<sub>二</sub>矣、我是大国主神者、時随<sub>二</sub>神教<sub>一</sub>祭祀、然猶於<sub>レ</sub>事無<sub>レ</sub>驗、天皇乃沐浴

齋戒、潔淨殿内而祈之曰云久、是夜夢有<sub>二</sub>一貴人<sub>一</sub>、向<sub>二</sub>立殿戶<sub>一</sub>自称云、大国主神、当今以<sub>二</sub>吾兒大田々称古命<sub>一</sub>祭

我者、則立平矣、天皇便以<sub>二</sub>夢教之辭<sub>一</sub>布告天下、遍求大田々称古乃得<sub>二</sub>茅渟陶邑<sub>一</sub>焉、天皇親問曰、汝誰子者乎、

对言、大国主神兒久斯比方命九繼之孫、己意富太々称古是矣、天皇大悦、即以<sub>二</sub>大田々称古<sub>一</sub>初令<sub>レ</sub>拜祭大国主神、

仍立<sub>二</sub>天社地社神<sub>一</sub>定<sub>二</sub>神地神戶<sub>一</sub>、于<sub>レ</sub>時疾病始息、天下衡倫、五穀既登、百姓亦饒、又地社奉<sub>レ</sub>祭八百萬神、詔天皇

朝廷奉<sub>レ</sub>仕物負八十伴緒取別<sub>二</sub>事依<sub>一</sub>賜国二日、食国政取持、白賜矣

一大鴨積命 此賀茂朝臣等祖

二大友主命 此大神朝臣等祖

三大多彦命 美作国大庭郡神直、石見国大市郡神直、的大神直、倭三川部、吉備国品治部、葦浦君等上祖者矣

右大多彦命、磯城瑞籬宮御宇初國所知御間城入彦五十瓊殖天皇御世國、荒振人等令平服、以三大国主神術魂荒魂、

取着於梓楯太刀鏡、遣於西國、于時初貢男女之調物、即但馬國朝來郡粟鹿村宿住矣也、

四意富弥希毛知命、神人部祖、淡路国三原郡幡多郷神人部川成祖矣

以上四人者大田々祢古命之兒也、

上件大多彦命御墓在美作国大庭郡米木原、

大多彦命兒大彦速命、母曰穗積朝臣等祖内醜男命之女玉降姫命

次大主命、此石見国大市郡神直、美作国大庭郡神直、又品治部葦浦君等先祖矣

次水練命、此卷向日代宮御宇大掃彦忍代別天皇行幸於志之、時持神事奉仕、此的大神直等、又倭御川部等先祖也、

右大彦速命、纏向珠城宮御宇活目入彦五十狹茅天皇御世但馬國粟鹿嶺荒振坐大神在、云三大国主神御子天美佐利

命、形如紫雲化、懸於虛中、然自由坂通往還人、十餘人往來人十人殺、今五人往、廿人往來十人殺、今十

人往、如是狀不一二、遍經數年、時于大彦速、心中恐懼、祭望於朝廷、此神狀申顯伎、即朝廷雜幣帛給鎮

祭伎、又粟鹿嶺白鹿角間粟生在伎、仍字為粟鹿大神、即民得安樂、国内無災難、又五穀登穗矣、

大彦速命兒武押雲命、母曰甲斐國造等上祖狹積穗彦命女角姫命

武押雲命兒猛日、母曰的大神直等上祖水練命女雲別姫命、祭主

猛日兒神部直速日、母曰倭三川君等上祖角大草命浦稚姫命

右人磯香高穴穗宮御宇稚足彦天皇御世依神拜祭神部直姓給伎、又但馬國造定給伎、即祭主以上非顯

次神部直高日、

速日兒神部直忍、母曰：物部連小事之女意富安姬命、

右人磐余稚桜宮御宇息長大足姬天皇御世但馬國人民率粟鹿大神荒術魂取、着於船鼻、傳二百濟、奉<sub>レ</sub>仕、然返祭來時、同朝廷神事取持奉<sub>レ</sub>仕、仍但馬國造止奉<sub>レ</sub>仕定給賜、又給<sub>二</sub>神宝楯二面、大刀二柄、鏡二面、玉一箇、手玉一箇、足玉一箇、神田七十五町九段百八十步、神戶二畑、上件物給、粟鹿大神宝藏立、神宝物畜積、始祭主忌始、上呼十一月寅日、中呼子日、下呼十二月申日祭鎮、

次神部直弟、

忍兒神部直伎閑、母曰：姨同物部連小事之女子小安姬命、

右人粟鹿大神祭主奉<sub>レ</sub>仕、

次神部直席屋、

次女神部直乙女、

伎閑兒神部直奈久、娶<sub>二</sub>神部直御景之女子酒女<sub>一</sub>

右人粟鹿大神祭主奉<sub>レ</sub>仕、

次神部直小麻呂、

祝神戶等祖、

奈久兒神部直宿奈、娶<sub>二</sub>神部直賀牟奈美之女子都良女<sub>一</sub>、

右人粟鹿大神祭主奉<sub>レ</sub>仕、

次神部直萬侶伎

田部等之祖、

次神部直赤麻呂

神部等之祖、

忌部祝廿人、

忌酒女祝廿人、

宿奈兒神部直二身、娶<sub>ニ</sub>神部直赤丸之女子久良子、

右人粟鹿大神祭主奉<sub>レ</sub>仕、

次神部直袁麻呂、

次神部直恒、

忌部祝卅人、

忌酒女祝卅人、

二身兒神部直小椅、娶<sub>ニ</sub>神部直宿奈之女子尔保布女、

右人、粟鹿大神祭主奉<sub>レ</sub>仕

次神部直袁志、

次神部直荒鹿、

次神部直与庭

忌部祝卅人、

忌酒女祝卅人、

小椅兒神部直都牟自、娶神部直衰志之女子殿女、

右人粟鹿大神祭主奉仕、

次神部直宿奈、

忌部祝卅人、

忌酒女祝卅人、

都牟自兒大九位神部直萬侶、娶神部直之女子秦女、

右人難波長柄豐前宮御宇天萬豐日天皇御世天下郡領并国造具領定賜、于時朝来郡国造事取持申、即大九位叙仕奉

忌部祝卅人、

忌酒女祝卅人、

官戸卅五人奇、

雜役等、

萬侶兒神部直根閑、

右人後岡本朝廷御宇天豐財重日足姬天皇御世時、但馬国民率新羅誅仕奉、即返参来、同朝廷御宇始叙朝来郡大領司所擬仕奉、又近江大津宮御宇天命開別天皇御世庚午籍勘造日依書算知而国政取持、国造具領并殿民源之是非勘定注朝廷進即庚午年籍、粟鹿郷上戸主神部直根閑年卅矣、神戸里切分奉、九条三里田、四里田已、十条四里田五里田六里田、十一条二里田已、野山林已、

忌部祝卅人、



忌酒女祝冊人、

官戸冊五人奇、

雜役等、

右根閑氏大明神天美佐利命者、神氏最初之天降、人皇治化之崇基也、此境山陰道但馬州朝来郡粟鹿郷也、尔時山海混沌、煙雲闇靄、庶民漸事人王、神靈未入皇帟、吾親皇命振固洲天下御坐名曰粟鹿大明神也、花夷未頒之時、荊樹点瑞之处、天下俄陰、霖雨久洪水、饑餓疫癘、生者流亡時焉、朝廷驚奇便下勅宣天文陰陽家勘奏占諮、大國主命子天美佐利依未受公崇忽致此恠灾也云々仍下勅宣、忽建宝殿、十二箇所別社、神戸二烟、神田七十五町五段百八十步、則定神立氏并祝部氏請下大和国大神明神氏人等也、隨則四季八節之祭、忌月供日之定、種々神玉、一々礼祭、自尔天下豐登、人民安平、是則一天之乃定、百王之長婦也、我大明神天降之時十一代後根閑今生氏中已勤神事、為業者武略也、抑新羅州奉為我朝二恣有虜掠之心、恒成度海之計、数率屯兵常以合戰、神代当初人皇次後已此兵難更以不絶間者、亦起来世灾何競、于時、根閑生年三十也、親被本朝之勅、遠對異域之將、生命不顧、戰勝無眠、遂而伐獲彼王軍也、雲濤万里、自得龜鼈之扶、弓矢千陳、軫使猿鴈而泣、渡海登涯、忍寒忘苦、彼舟帆飛而遁者、則是大王雄風之德也、弦箏指而中者、豈非明神靈鑄之感乎、勤王之忠爰顯、將軍之号因蒙、忝思鳳闕之長、今遠伝勲功之難、古護国平世憂離除尤、凡以我氏大明神通化威驗而已、根閑壯日云嚙、老命欲尽、今茲七十也、旧譜如此、後代可亟致功者為名也、其盟者感神矣、為繼氏於万代、令我神部而掌也、夫海底之石非鉄不釣、日中之火非玉不把、越鳥必巢南枝、胡馬定嘶北風、物之相感、人以匡妨、況更我氏權現者起請垂迹乎、所以帝範賴誓、神事所期遙守二氏之礼節、可賽百王之豐年庶矣、後輩同以是心、神代記内次、可実録之耳也、

和同元年歲次申成八月十三日 筆取、神部八島、

勘注言上、正六位上新羅將軍神部直根閑

神祇官

但馬國朝來郡粟鹿明神元記勘錄帳証文、捺官印、為令公驗、下領於社如件、

長保四年正月廿一日

正六位上行權少史齋部宿祢

伯守從四位下秀賴王

正六位上行大祐齋部宿祢 在判

從五位上行大副卜部宿祢 在判

正六位上行權大祐直宿祢

權大副從五位下大中臣朝臣輔親

正六位上行權大祐大中臣朝臣

從五位下行少副大中臣朝臣

正六位上行少祐伊伎宿祢 在判

從五位下行權少副大中臣朝臣

正六位上行權少祐大中臣朝臣 在判

正六位上行權少祐直宿祢 在判

正六位上行大史直宿祢 在判

正六位上行少史直宿祢

奉行 同年十二月廿一日

正五位下行守高階朝臣道順

奥書は

「和同元年八月十三日勘注粟鹿大神元記一卷、就田中教忠氏所藏古卷二前年謄写既訖、今為便披読更清寫一本以珍藏、實是為神部直氏旧譜矣、按延喜神名式曰、但馬國朝來郡粟鹿神社一座、名神大、維斯元記、

先<sub>ニ</sub>和銅五年正月廿八日撰錄古事記既三年五箇月餘、可<sub>レ</sub>謂<sub>ニ</sub>希代古記<sub>一</sub>、又有<sub>ニ</sub>幸術魂、術魂、荒魂、荒術魂等語<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>以<sub>ニ</sub>攷<sub>レ</sub>古、今凌<sub>ニ</sub>寒威<sub>一</sub>執<sub>ニ</sub>毫毫<sub>一</sub>、偏好古餘習也、明治四十年十二月十八日、正四位平朝臣善臣九十一齡識<sub>（「上は「善臣」、下は「彌齊之記」の可」）</sub>

明治四十一年一月廿九日加<sub>ニ</sub>訓点<sub>一</sub>訖、九十二翁靖齋善臣再識<sub>（「善臣」の印）</sub>とある。

九条家本『元記』は現在では卷子本に装訂されてあるが、元は無装のままであり、包紙に「但馬国朝来郡粟鹿大明神元記」と題して、斐紙十六枚続きに本文を墨書し、「社惣行事神節依 行事印之 在判」という綴目裏書を持つ。その首部は次のようなものである。

□領伝領為旦

新羅將軍正六位上神部直根閑謹言 請官符事

依 勅宣旨勘注言上但馬国鎮守阿米美佐利命粟鹿大明神元記

神祖伊佐那伎命与妹伊佐那美命二神相生之児

合参神

大日神

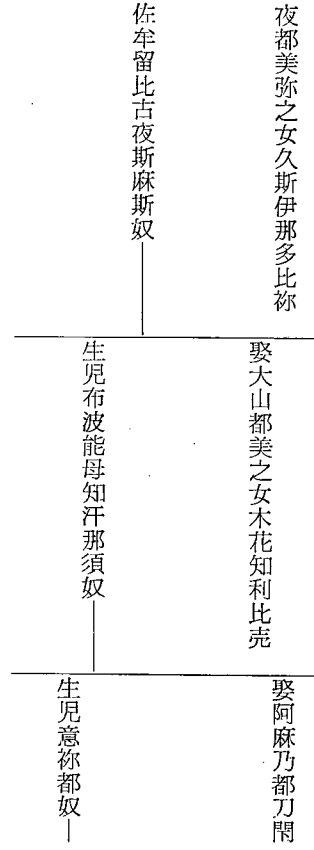
次月神

次素佐乃乎命

生児蘇我能由夜麻奴斯祢那

比素佐乃乎命登天從天降來於出雲樋川上鳥上山

娶伊那多美夜奴斯名須佐能



<p>生兒天布由伎奴</p>	<p>亦名八千梓命亦名字都志国玉 亦名八嶋男命亦名大己貴命亦</p>
<p>乃知尼</p>	<p>生兒大國主命</p>
<p>娶布努都祢美之女布豆祢美</p>	<p>一名大物主亦名意富阿那母知 娶佐志久斯布刀比売之女佐志久斯和可比奴</p>

娶天止牟移比売

坐粟鹿太社

生兒阿米弥佐利命

又娶三嶋溝杭耳之女玉櫛姫

嫁神武天皇生綏靖天皇  
并皇子

次溝杭矢瀨姫蹈躰五十鈴姫命

次五十鈴依姫命 嫁綏靖天皇生安寧天皇

妹

売

命亦名名葦原色表命

命亦名幸術魂辞代主命  
名八千弟命

又娶溝杭耳之孫女活玉依姫

大神朝臣祖也自神武天皇  
御世始至綏靖天皇御世

生兒久斯比賀多命

(以下略)

為内臣国權白賜墓  
在泉国知努乎曾村

次に右の二種の『元記』についての研究を紹介しよう。前にも述べたように『元記』を初めて紹介されたのは是沢氏である。氏は九条家の文庫中に九条家本『元記』を発見され、また別種の谷森本『元記』が宮内庁書陵部に架蔵されていることを知って、昭和三十年に「粟鹿神社祭神の新発見」(『神道宗教』十号)、三十一・二年に「粟鹿大明神元記の研究」(『日本学士院紀要』十四卷三号、十五卷一号)、三十三年に「但馬国朝来郡粟鹿大明神元記に就いて」(『書陵部紀要』九号)という三つの論文をつぎつぎに発表された。

氏の九条家本『元記』に関する論及は多岐にわたるが、鎌倉ないし室町初期の写しであること、中世以来混乱していた粟鹿神社の本当の祭神は天美佐利命であったこと、『元記』撰録の和銅元年八月十三日という日付は『日本書紀』(以下、『紀』と略称) 持統五年八月十三日に大三轮氏以下十八氏に纂記を上進せしめたことと無関係ではなく、『元記』は大三轮氏が上進した纂記と密接な関係を有すること、『元記』の撰録者神部直根聞は『紀』天智二年三月条に「中将軍…三輪君根麻呂…率三万七千人打三新羅」とみえる三輪君根麻呂と同一人物であること、古い豎系図で「娶」「生児」などの豎系図用語を使用しているのは、平安初期の和気系図(円珍系図)と丹後国与謝郡籠神社の海部祝系図のみであるが、九条家本『元記』はそれよりも古い和銅の豎系図として非常に貴重な史料であること、また『元記』と『紀』とが対応する箇所をいくつか検討して、両者が酷似ないし近似するからといって一概に『紀』の文章を剽窃したとはいえないこと。そして確かに『元記』の中には漢風諡号や国名など和銅元年の年紀と矛盾する点もあるけれども、その原本は相当に古いものとみてさしつかえないと判断され、この史料は神話や古代史の研究にとっては勿論、神道史や国語学の研究にとってもすこぶる貴重な古記録であることを強調された。

右の九条家本『元記』に関する是沢氏の研究に触発されて、谷森本『元記』をもとに「古代氏族の系譜—ミワ氏族の移住と隆替—」(『芸林』七巻四号、昭和三十一年)という論考を発表されたのが田中卓氏である。田中氏は



是沢氏が九条家本『元記』ほどに重視されなかった谷森本『元記』を拾いあげ、豎系図で記述され漢風諡号を含む九条家本よりも、『釈日本紀』所引「上宮記」逸文などと同じく系譜の書下し表記をとり国風諡号で書かれた谷森本が原本に近いと推定されて、精緻な検討と考証を加えられた。

そのすべてを紹介できないが、特に『元記』の主要部分をなす系譜部分は『記紀』『先代旧事本紀』などの古文獻と異同を含む独自の所伝が少なくなく、系譜の書法における「上宮記」逸文との類似、神后皇后の「天皇」の称、「弥」の特殊仮名遣いなどから、頗る貴重な古文獻と認めうると判定された。更に勘注言上者の神部直根聞は『紀』天智二年三月条の三輪君根麻呂と同一人物であること、和銅元年八月十三日という年紀と『元記』という言葉について、持統五年八月十三日条の墓記（纂記）が基記（モトツミ）の誤写と解釈すると、△持統五年八月十三日の大三輪氏基記―大宝二年の国造記―和銅元年八月十三日の『元記』△という一連の筋道が辿られ、『元記』原本（系譜部分の原形）の成立した和銅元年という年紀を疑うに十分な根拠に乏しく、『元記』原本はまさに希代の古記であると結論されたのである。

なお、氏は崇神天皇の御世、大多彦命が西国平定に派遣され、ついに但馬国朝来郡粟鹿村に定住して但馬の神部直の祖となったという『元記』の記事に着目し、これを大和の三輪氏（田中氏ではイヅモ系氏族）の分派の移住と解釈して、古代イヅモ族の本貫は畿内大和であって崇神朝にその一派が出雲へ移住したという持説△古代イヅモ族のヤマト本貫説△を補強されたのであったが、この論文が同氏著『日本国家成立の研究』に収録された昭和四十九年の時点で、「今案」としてさきの補強の試みを撤回されている。

以上、簡略ながら二種類の『元記』の写本の概要と先学の研究とを紹介してきた。鎌倉・室町初期の写本である九条家本と明治時代に写された谷森本とは書写の時期に数百年のひらきがあるとはいえ、いずれ劣らぬ貴重な古

記録であると思う。私としてはどちらかという系譜の書下し表記の谷森本『元記』のほうが原本に近いのではないかと推察するが、この問題の進展のためにも谷森本の祖本である田中教忠氏旧蔵の「古巻」が一日も早く世に出されることが望まれる。

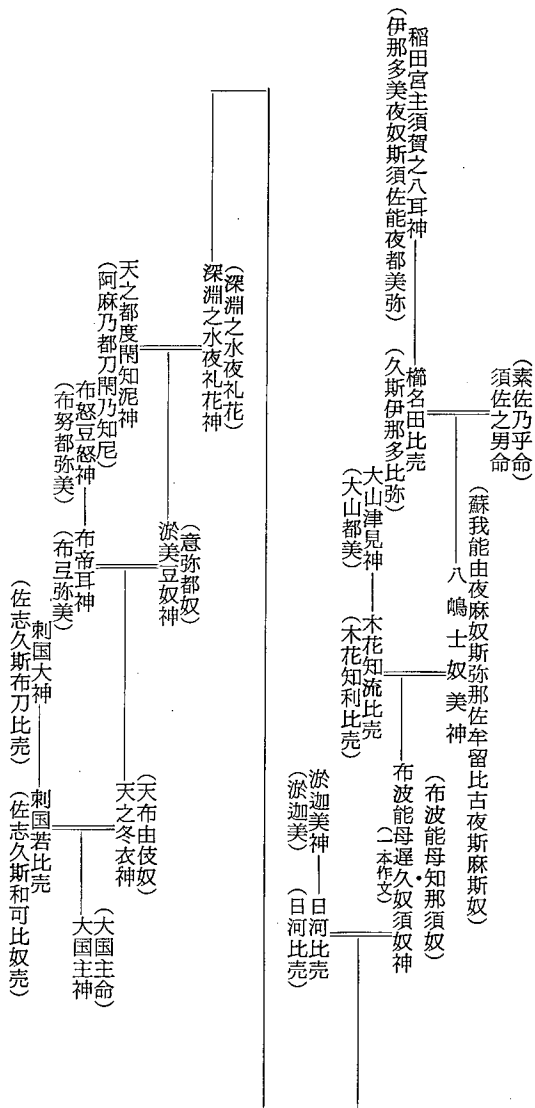
とにかく是沢・田中両氏の精密なすぐれた研究によって、数々の重要な新知見がもたらされ、『元記』の貴重な史料価値が立証されたことにはかわりはない。次に両先学の驥尾に附して、いささか愚論を展開したいと思う。

## 二 神字の有無と「神」概念の成立

『元記』のなかでもっとも『記』の出雲神話の所伝と酷似する部分は、「神祖伊佐那伎命与妹伊佐那美命二神相生之児」という本文書出しから大国主命に至る系譜部分である（以下、首部と仮称する）。しかもこの首部は単に『記』と近似するのみでなく、用字といい神名といい独自の点も少なくない。つまり、『元記』首部は一見『記』の所伝と非常に似かよっているけれど、見方をかえれば全然似ていないとも言えるのであって、すこぶる興味深い問題を蔵している。したがって、小稿ではこの首部のみを考察の対象とし、残りの大部分の吟味は後日を期したいと思う。

さて、『元記』首部のなかでもっとも『記』の所伝と似ているのは、素佐乃乎命から大国主に至る神系譜である。今『記』をもとにして両者を対比すると第一図のようになる。括弧の中は谷森本『元記』。

第一圖



両者を對比すれば明らかなように、世系については完全に一致する（ただし九条家本には深淵之水夜礼花がない）が、用字は一方が字音仮名を多用しているのに他方は字訓仮名が多い。神名もかなり一致するといえ八嶋土奴美神（『記』）と蘇我能由夜麻奴斯弥那佐牟留比古夜斯麻斯奴（『元記』、これはむしろ『紀』第一の一書の清之湯山主三名狭漏彥八島篠の方と近い）などは大分違う。つまり、世系や神名が完全ないし相当に一致するからといって、『元記』が『記』を参考にしたとはいえないのである。田中氏は両者の関係を「直接の親子関係にある所伝で

なく、親を等しくする兄弟関係の系譜」と判断されている。たしかに氏のいわれるように親子関係ではないが、兄弟関係であるかは疑問であり、むしろ後述のように『紀』第一の一書と親しいようである。

右のごとき異同のほかに重大な相違がある。それは『元記』首部の神名は『記』の神名とちがって、すべての神名の末尾に神字が附されていないということである。従来の研究ではこの点が見落されていたが、これは『元記』首部のみならず『元記』そのものの史料価値を論する上で、重要なキーポイントといえる。

『記紀』はほとんどの神名の末尾に神字を附しており、なかでも『記』の場合その傾向が著しい。しかし『記紀』の神名にみられるごとく、本来すべての神々が「——ノカミ」「——神」というふうに「カミ」と呼ばれ、神字を附されていたであろうか。それはすこぶる疑問である。たとえば『記紀』の神名を二、三比較してみても、句句廻馳（『紀』）と久久能智神（『記』）、大山祇（『紀』）と大山津見神（『記』）、金山彦（『紀』）と金山毘古神（『記』）、罔象女（『紀』）と弥都波能売神（『記』）のように、『紀』にくらべて『記』はほとんどの神名の末尾に画一的に神字を書き加えているのであり、これは神字が附されていない『紀』の神名が古形で、『記』の神名は修飾された後の形であることを示している。したがって、神字が附されていない『元記』首部の神名は、画一的に神字を書き加えた『記』の神名よりも古い所伝なのであり、この九条家本・谷森本『元記』首部こそは、素佐乃乎命神裔譜の最古の形を伝える非常に貴重な史料である。

ところで、今問題にしている神字の有無ということに関しては、すでにすぐれた研究がなされている。溝口睦子氏の「記紀神話解釈の一つの試み」（『文学』四十一巻十・十二号、四十二巻二・四号）と題する論文によると、古い時代にはミ・チ・ネ・ヒ・ノ・タマ・ヌシなどさまざまな神霊・精霊を「神かみ」という概念で総括的にとらえる思想や信仰は発達しておらず、山の神や木の精や稻の霊などは単にヤマツミ・ククノチ・イナヒと呼称され、ミ・チ・

ヒとして観念されているだけであつた。またカミもアラブルカミ、というように恐るべき自然や自然の物を表わす一つの言葉でしかなく、ミ・チ・ネ・ヒなどさまざまな神靈観・自然観を表現する言葉と同列の言葉であり、しかもその一部分にすぎなかつた。こうした種々雑多な個々の神靈観や自然観を『記紀』にみられるような「神」という概念で総括して、ヤマトミノ神・ククノチノ神・ムスヒノ神、というふうに「神」という一つの語で統一的に表現するようにしたのはずっと後のことであり、こうした「神」概念の発達は六世紀後半以降のことであろうという。ごく大雑把な紹介にすぎないが、溝口氏の見解は神字のない『元記』首部の神名と画一的に神字を附した『記』の神名とを見くらべるとき、まことに興味深いものがある。

要するに、神名の末尾に画一的に神字を書き加え「神」概念のなかでとらえなおした『記』にくらべ、大全都美・阿麻乃都刀閑乃知尼・意弥都奴のように、——ミ、——チネ、——ヌという本然的な古い神靈表現を残し、その下に神字が附加されていない『元記』首部の素佐乃乎命神裔譜は、『記紀』的な「神」概念成立以前のものであると推定できるのであり、はからずも溝口氏の主張の正しさを証明するものである。更に田中氏が指摘されたごとく『記』の系譜記載様式は、「兄八嶋士奴美神、娶大山津見神之女、名木花知流比売、生子、布波能母遅久奴須奴神。此神、娶淤迦美神之女、名日河比売、生子、深淵之水夜礼花神。此神、娶三天之都度閑知泥神、生子、淤美豆奴神。…」というぐあいに「此神」の一句を挿入して、「此神、娶B二生児C、此神、娶D二生児E」というように「娶」と「生」の主格を明らかにしているが、『元記』は「此素佐乃乎命……娶A二生児B、娶C二生児D、娶E二生児F」というぐあいに「此神」の一句が挿入されておらず、CやEを娶った主格が必ずしも明確でない。この点は『釈日本紀』所引「上宮記」逸文の系譜記載様式と同じである。右のごとく『元記』首部の記載様式において「此神」の一句が挿入されていないのは、それが「上宮記」逸文と同じく古い書式を伝えるものだからであろう。

が、もう一つの理由は『元記』の神名の末尾に神字がなく、「神」概念成立以前の系譜であるが故にはかならない。以上、神名の末尾における神字の有無という点に注目して述べたのであるが、九条家本・谷森本『元記』が原本の内容をかなり忠実に伝えていることが知られ、しかも原『元記』首部が依拠した史料の古さも推測されるのである。後にも述べるように原『元記』が参考にした素佐乃乎命神裔譜は、六世紀頃に成立したものではあるまいか。とにかく、『元記』首部は素佐乃乎命神裔譜についての最古の史料であり、「神」概念の形成を考える上でも格好の文献といえる。

### 三 山岐大蛇退治神話について

#### (一) 『紀』第一の一書との比較

『記』および『紀』本文によると、素佐乃乎命は高天原から追放されて出雲に天下り、山岐大蛇を退治して、その尾から出現した宝剣を高天原に献上し、イナダヒメと結婚するというストーリーになっている。ところが、『元記』首部には「此素佐乃乎命登<sub>レ</sub>天、從<sub>レ</sub>天降<sub>一</sub>来<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>出雲樋川上島上山<sub>一</sub>、娶<sub>ニ</sub>伊那多美夜奴斯名須佐能夜都美弥之女久斯伊那多比弥<sub>一</sub>生児、……」とあるのみで、大蛇退治も宝剣献上のことも書かれておらず、出雲に天下ってただちにイナダヒメと結婚している。これは『元記』首部における第二の特徴である。そこで『元記』と『記紀』の所伝の対比表をつくってみると次のとおりである。

第二表

日本書紀（宝剣出現章）					古事記	元記	異伝	要素	
第四の書	第三の書	第二の書	第一の書	本文				①	②
新羅国、出雲国簸川上所在鳥上之峯		安芸国可愛之川上	出雲簸之川上	出雲国簸之川上	出雲国之肥河上名鳥髮地	出雲樋川上鳥上山	降臨の地名		
	脚摩乳手摩乳	脚摩手摩（稻田宮主簀狭之八箇耳）	稻田宮主簀狭之八箇耳	脚摩乳・手摩乳（稻田宮主神）	足名椎（稻田宮主須賀之八耳神）手名椎	伊那多美夜奴斯名須佐能夜都美弥	イナダヒメの父母の名		
			清之湯山主三名狭漏彦八嶋篠（二云、清之繫名坂輕彦八嶋手命、又云、清之湯山主三名狭漏彦八嶋野）	大己貴神	八嶋士奴美神	蘇我能由夜麻奴斯弥那佐牟留比古夜斯麻斯奴	スサノヲ・イナダヒメの子の名		
有り	有り	有り	無し	有り	有り	無し	大蛇退治の有無	③	
天へ	無し	無し	無し	天神へ	天照大御神へ	無し	宝剣の献上	④	
	⑤の五世孫	⑥の六世孫	⑦の五世孫	スサノヲの子	⑧の五世孫	⑨の五世孫	世系	⑩	

第二表に明らかなとおり、大蛇退治も宝剣の献上もないのは『元記』と『紀』第一の一書だけである。左に『元記』に対応する第一の一書の全文を書き出すと次のとおりである。

『元記』

此素佐乃乎命登天、從天降來於出雲樋川上鳥上山、娶伊那多美夜奴斯名須佐能夜都美弥之女久斯伊那多比弥二生児、蘇我能由夜麻奴斯弥那佐牟留比古夜斯麻斯奴、……

……（四代略）……… 大国主神、………

第一の一書

素戔鳴尊、自天而降到於出雲簸之川上。則見稻田宮主簀狭之八箇耳女子号稻田媛、乃於奇御戸為起而生児、号清之湯山主三名狭漏彥八嶋篠。一云、清之繫名坂輕彥八嶋手命。又云、清之湯山主三名狭漏彥八嶋野。此神五世孫、即大国主神。篠、小竹也。此云三斯奴。

右のように『元記』と第一の一書は構文がよく似ており、第一の一書が「此神五世孫、即大国主神」と途中の系譜を略省している点が少し違うだけである。しかも両者は大筋で一致するのみならず、以下のように細かい点でも酷似している。先の第二表を見ると、①「降臨の地名」に関しては『記』・『紀』本文・第二・第四の一書とも「出雲国」「安芸国」と書かれてあり、これは律令制の出雲国、や安芸国を指している感じが強いが、『元記』と第一の一書では単に「出雲」となっていて、国郡制成立以前の地名としての古さが感じられる。②「イナダヒメの父母の名」についても、『元記』の「伊那多美夜奴斯名須佐能夜都美弥」と第一の一書の「稻田宮主簀狭之八箇耳」は完全に一致する。一方、『記』では「稻田宮主須賀之八耳神」とあって、スサとスガ、神字の有無という点で前二者と大部ことなる。③「スサノヲ・イナダヒメの子の名」についても、『元記』の「蘇我能由夜麻奴斯弥那佐牟留比古夜斯



麻<sup>ス</sup>奴<sup>ヌ</sup>」は、『記』の「八嶋士奴美神」よりも第一の一書の「清之湯山主三名狹漏彦八嶋篠、……篠、小竹也。此云<sup>ス</sup>斯奴<sup>ヌ</sup>」とそっくりで、「斯奴」という用字まで同じく、ともに神字が附されていない。しかも両神名に冠せられた「スガノユヤマ」は『出雲国風土記』大原郡海潮郷条に「須我小川之湯淵村、川中温泉」とあるものに当り、出雲在地の伝承と密着したものである。なお、岩波日本古典文学大系本『日本書紀 上』では、第一の一書の「清之湯山主三名狹漏彦八嶋篠」の「漏」字を「る」と訓んでいるが、この部分は『元記』では「牟留」と書かれているので、「漏」は「むる」もしくは「もる」と訓むべきであり（その意味は「守」か）、これは『紀』編者がもとの資料の「牟留」という字音仮名表記を「漏」に訓訳化したことを物語るものであろうが、正しくは「守」と訳すべきであつたろう。次に④「大国主命の世系」をとってみても、『元記』と第一の一書はともにヤシマシヌの五世孫ということと合致する。ただ第一の一書には途中の系譜が記されていないが、これはもともと系譜部分が無かつたことを意味するものではなくて、途中の系譜を省略したために、「此神五世孫、即大国主神」という表現になつたものであつて、元来『元記』と同じ系譜がそなわつていたはずであらう。

さて、前にも触れたように、田中氏は『元記』の素佐乃平命神裔譜と『記』のそれとは「親を等しくする兄弟関係の系譜」であると推定されたが、右に記したように『元記』はむしろ『紀』の第一の一書とよく似ている。大蛇退治や宝剣献上の要素がなく、神名がよく一致し、神名の末尾に神字が付されていないという数々の点で共通する第一の一書こそ『元記』と兄弟関係にあるのではないだろうか。そして大蛇退治・宝剣献上の要素がない『元記』と第一の一書の素朴な所伝こそ、山岐大蛇退治神話の本然的な古い伝承であり原形なのではあるまいか。『元記』首部におけるこの第二の特徴は、古風な字音仮名表記、神名の末尾に神字が附されていないという特徴とあいまって、『元記』の史料価値の高さを証明する重要なポイントといふべきであらう。

## （二）山岐大蛇退治神話の形成

山岐大蛇退治の神話は第二表にみられるごとく『記』および『紀』本文にもっとも詳しく描かれており、第二・三・四の一書も異伝を伝えているが、第一の一書のみは大蛇退治のことは一言半句も語られていないのである。こうした大蛇退治神話の諸異伝を比較検討し、この神話が歴史的にどのように発展してきたかということを考察したものに三品彰英氏の「出雲神話異伝考」（三品彰英論文集『建国神話の諸問題』所収）と題する論文がある。

三品氏は山岐大蛇退治神話に関する五個の異伝（『記』、『紀』本文・第一・二・三の一書）のなかから、a 降臨地名、b 聖婚する女性、c 聖婚の宮居、d オロチ退治、e 神剣名、f 神剣の奉献、g 聖婚の歌の、七要素を抽出した上で、その七つの要素を五個の異伝について比較検討した結果、大蛇退治神話が三つの段階をへて形成発展したと結論された。すなわち、第一段階は『紀』第一の一書の所伝で、素佐乃乎命とイナダヒメの聖婚だけが語られている（a・b・c）。第二段階の『紀』第二・三の一書では、大蛇退治（d）と神剣（e）の話が加わって本格的な大蛇退治の神話が形成される。最後の第三段階の『記』と『紀』本文の所伝においては、神剣を奉献する要素（f）と成婚歌（g）が添加されて、もっとも文学的な内容となっている。ただし、大蛇退治と神剣奉献の要素が欠けている第一段階の『紀』第一の一書の所伝は、神話の断片ではなくて、大蛇退治神話のもっとも初期的な原形であり、出雲の祖神素佐乃乎命を巫女イナダヒメが神妻となつて奉祀するという出雲在地の儀礼や信仰に則したものである。三品氏はこれを「奉斎型伝承」と命名された。

素佐乃乎命とイナダヒメの聖婚のみを語る第一の一書の素朴な所伝こそ、大蛇退治神話の原初的な形にはかならずぬという三品氏の所説は、私がさきにくらべた『元記』の所伝の考察結果とも合致し、第一段階の「奉斎型伝承」

を本然的形態として三段階の発展経過をたどるという三品氏の考えは、妥当な見解であると思われる。

三品氏同様、『紀』第一の一書の素朴な所伝に注目し、他の異伝との比較を通して論究られた人に次田真幸氏がある。氏は「八岐大蛇神話の構成と成立」（『日本神話の構成』第五章）において、大蛇退治の神話を（1）から（4）の四つの要素に分類され、（2）大蛇退治と（4）スサノヲとイナダヒメの聖婚の二つは基本的モチーフには違いないが、そのなかでも（4）こそはもっとも基本的な重要なモチーフであり、一方、（3）神剣献上の要素は本来この神話にそなわっていた要素ではなくて、後から加えられた新しい要素である。そしてこの四要素を『紀』の四種の一書に配当すると、第一の一書は（1）簸の川上への天下りと（4）、第二の一書は（1）（2）（3）（4）、第三の一書は（2）（3）（4）、第四の一書は（1）（2）（3）の要素から成りたっている。このなかで問題の第一の一書は（2）と（3）を欠いてもっとも単純であること、第四の一書に（4）を欠いていることが注目される。これは第一および第四の一書の説話形式が、神話の単純化され、または省略された形ではなくして、第一および第四の一書の伝えるような単純な形の説話が組み合わされることによって、『記』や『紀』本文のような完成した神話ができたものと考えるべきである。大蛇退治の神話は第一の一書のような素佐乃平命とイナダヒメとの結婚を語った単純な説話が、簸の川流域で治水工事が行われるようになってから大蛇退治神話へ発展し、また簸の川上流が砂鉄の産地であったため、宝剣の話が結びつけられて語られるようになった。

右のように次田氏は三品氏が考察の外におかれた第四の一書の所伝も含めて検討され、「奉斎型」から「退治型」という発展の過程を一段と明らかにされている。

異伝の比較検討を基本にして論究したものではないが、三品・次田両氏と同様な見解は松村武雄氏や松前健氏の所説にもみられる。松村氏は『日本神話の研究』第三巻において、山岐大蛇退治神話は本然的には「招ぎ斎き型」

であって「退治型」ではないとされ、「招ぎ齋き型」から「退治型」への変転を、母胎を同じくする新神素佐乃乎命が旧神大蛇を邪霊として退治する宗教的葛藤の現象として解説されている。「山岐大蛇神話の構造と形成」（『日本神話の形成』第三章）における松前氏の所説は、この神話の原形を農耕祭式としての「招ぎ齋き型」とみなし、紀伊を本拠とする素佐乃乎命信仰の到来によって、旧来の土俗は一変し、旧神大蛇は新神素佐乃乎命によって斬り殺される怪物になりさがってしまったと論じられている。

右に紹介した四氏の研究は、大蛇退治神話の原初的形は第一の一書にみられるごとき「奉齋型」「招ぎ齋き型」であり、それが「退治型」へ発展していったという点で共通している。

ところが、一方こうした考え方に對する異論も存在する。『シンボジウム日本の神話3・出雲神話』の「二 ヤマタノオロチ退治」において、報告者大林太良氏は三品氏の三段階発展説に反対され、三品氏が一番古い形だとして評価した『紀』第一の一書について、これは元来『記』や『紀』本文の大蛇退治神話とだいたい同じことが書かれてあったのが、それとよく似た内容の別伝を『紀』本文としてさきに記したので、本文と少し違う点だけを書き出して第一の一書として示したものにすぎず、三品氏のシェーマは基礎から崩れると述べられている。またシンボジウムの出席者の一人である伊藤清司氏も、およそ『紀』の一書というものは、例外はあるとしても前出の伝承はこれを省略しているという前提で見るべきで、同じ一書でも本文あるいは前出の一書と重複する部分が最初の部分にあたる時には、ことわりなしに省略して異伝のところから書きだし、おしまいが重複する場合には特別注記せずに省略している。ただし文中に重複がある場合にはその部分を「云々」と記して略す。「これが基本的な一書の省略を含めた記述形式」であるから、三品氏の仮説は正しくないと発言されている。

『紀』の一書のとりあつかい方をめぐって三品氏と大林・伊藤両氏との間には基本的な認識の相違がみられる。

たしかに大林・伊藤氏の意見は鋭利ではあるが、第一の一書に関する限り、これは大蛇退治も宝剣献上もない『元記』の所伝と構文・神名ともにほぼ合致し、両者は兄弟関係にある史料と推測されるので、第一の一書は『紀』本文との重複をさせて大蛇退治や宝剣献上の要素が省略された所伝であるとは断言できないと思う。大蛇退治と宝剣献上の要素を欠く第一の一書の所伝を大蛇退治神話の原形であるとする三品説は支持できると考える。

なお、宝剣献上の要素が後からつけ加えられたことについて、『記』の天岩戸の段に「取<sub>二</sub>天安河之河上之天堅石<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>三金山之鉄<sub>一</sub>而、求<sub>二</sub>鍛人天津麻羅<sub>一</sub>而、科<sub>二</sub>伊斯許理度売命<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>鏡。科<sub>二</sub>玉祖命<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>八尺勾璫之五百津之御須麻流之珠<sub>一</sub>而<sub>二</sub>」という三種の神器製作の話が記されているが、天津麻羅は何を作ったか明確でない。おそらく剣を作ったのであろう。倉野憲司氏は天津麻羅の下に「令<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>劍<sub>一</sub>」という一句が元来そなわっていたのを、後に草薙剣献上の話が割込まれたために、意図的に「令<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>劍<sub>一</sub>」の一句を削り落したのだと述べておられる（『日本神話』）。妥当な解釈といふべきであろう。また『出雲国風土記』にも大蛇退治や宝剣献上の記述はない。

とにかく、天下った素佐乃乎命がただちにイナダヒメと結婚するという『元記』首部の所伝は、大蛇退治も宝剣献上の要素もない『紀』第一の一書の所伝と親を等しくする兄弟関係にある所伝であり、山岐大蛇退治神話の原形や「奉斎型」「招ぎ斎き型」から「退治型」への発展を考える上での重要な史料として、神話研究者によって今後さらに検討されてよいのではあるまいか。

#### 四 素佐乃乎命神裔譜について

『元記』首部の素佐乃乎命神裔譜はほとんどの神名の末尾に神字が附されていず、その間に大蛇退治も宝剣献上のことも記されていないことを述べてきたのであるが、それはまたこの神系譜が相当に古いものであることを推測

させる。次に『元記』の古風な字音仮名に注目して、神裔譜成立の年代について考えてみたい。

『元記』首部の素佐乃乎命から大国主命に至る系譜は、ほとんどの神名が一字一音の字音仮名で書かれ、『記』のそれにくらべ一見して古風を感じさせる。そこで「此素佐乃乎命……」から「大国主命（一名・亦名は含まず）」に至る神名に使われた字音仮名を、推古朝遺文・藤原宮木簡・『記』の字音仮名と比較してみると、第三表のごとくである（□は推古朝遺文・◇は藤原宮木簡、―は『記』の仮名と一致するもの。右寄は甲類、左寄は乙類）。

〔第三表〕

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
和		夜	麻	波	那	多	佐	可	阿
								迦・我	
ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い
	利		弥	比		知	斷	伎	伊
			美				志		
	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
	留	固	牟	布	ぬ	都	須	久	汗
					怒				宇
					努				
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え
	和		弥	閑	尼	旦			
			亮						
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お
乎		母			乃	正	乃	固	游
					能		( 蘇)		意

右表にみられるように『元記』の仮名は『記』の仮名とかなりよく一致するが、一致しないものもある。なかでも弥は推古朝遺文に特有な上古音であり、止・乎も『記』にみえない仮名である。また斯は『記』では、本文よりも歌謡の中に多くみられる仮名であり、「斯、婦斯、麻宮治三天下一名阿米久爾意斯、波羅岐比里爾波弥己等……」（元興寺露盤銘）のように推古朝の金石文ではシの常用仮名であるが、『元記』でも「蘇我能由夜奴斯、弥那佐牟留比古夜斯、麻斯、奴」というふうに多用されており、志の用例二に対して斯の用例は七である。このようにみてくると、『元記』の仮名は『記』の仮名と相当に一致するとはいえ、推古朝遺文や藤原宮木簡に特有な仮名とも一致するものもあり、推古朝遺文と『記』の中間的位置にあるようである。

例えば、『元記』のミ甲類に対する二種類の仮名についてみると、イ「須佐能夜都美、弥」、ロ「大山都美」、ハ「蘇我能由夜麻奴斯、弥、那佐牟留比古夜斯、麻斯、奴」、ニ「淤迦美、ホ「布努都弥美」、ヘ「布豆弥美」、ヘ「意弥、都奴」というふうに、『記』におけるミの常用仮名美とともに古層の仮名弥が使用されている。とくにイ・ホ・ヘの場合は「美弥」「弥美」という新旧とりまぜた特異な表記法がみられるが、これは元は「弥、弥、弥、弥、那利」（『魏志』倭人伝、投馬国の官名）のように「弥弥」であった公算が高い。この官名の「弥弥」と意味は違うが、聖徳太子の名は「有麻移刀等已弥、弥、乃弥己等」（元興寺露盤銘）、「等与刀弥、弥、大王」（釈迦像造像記）、「等已刀弥、弥、乃弥己等」（天寿国繡帳）、等已刀弥、法大王（『上宮記』逸文）というふうに古い史料ではすべて「弥弥」と記されている。一方、『記』の神・人名におけるミの用字はすべて「美美」「耳」である。つまり『元記』の用字「美弥・弥美」は古い用字「弥弥」と新しい用字「美美・耳」の中間的形態を示しており、この傾向は『元記』の仮名の多くが『記』のそれとよく一致することともに、推古朝遺文や藤原宮木簡にしかみえない仮名とも一致する仮名が含まれていることと無関係ではない。少くとも『元記』の素佐乃乎命神裔譜における仮名は『記』のそれよりもやや古い時代の

もので、和銅元年の年紀と大きな矛盾はないといえよう。

しかしながら、『元記』の素佐乃乎命神裔譜中の神名には神字が附されていず、大蛇退治神話の原形と考えられる所伝が含まれていることを考慮すると、この系譜が作られたのはもっと古い時代であろう。そう推測される一つの理由は、この系譜の非氏族的性格による。『記』の所伝をもとに須佐之男命から大国主命を経て遠津山岬多良斯神にいたる十六代の出雲系神統譜を簡略化して示すと次のとおりである。

須佐之男命—八嶋士奴美神—布波能母遲久奴須奴神—深淵之水夜礼花神—淤美豆奴神—天之冬衣神—

—大国主神—鳥鳴海神—国忍富神—速邇之多氣佐波夜遲奴美神—邇主日子神—多比理岐志麻流美神—

—美呂波神—布忍富鳥鳴海神—天日腹大科度美神—遠津山岬多良斯神

みられるとおり長大な系譜であるが、これらの神々のなかである特定の氏族の祖神であると『記』に明記されている神は一柱としてなく、あくまでも純粹な神系譜である。しかも須佐之男命と大国主神を除けば、ほとんど活動が語られない神ばかりである。氏族の基盤をもたないこのような神系譜を『記』編者はなぜ長々と書き連ねたのであろうか。それは『記』編者がなんらかの必要に迫られたからであるというよりは、元々この神系譜が「帝紀・旧辞」の類に明記されていたが故に、それを忠実に書き写したまでのことではあるまいか。そしてその際に、『記』編者はこれらの神名の末尾に画一的に神字を附加するという潤飾をほどこしたのであろう。私は素佐乃乎命神裔譜はすでに六世紀頃に形成されていたと考える。

さて、先に考えた『元記』の字音仮名は、大方『記』の仮名と一致してきほど古いものではないが、一部に弥と



いう上古音や「美弥・弥美」のように過渡的な用字法が含まれ、後者は「弥弥」という推古朝遺文の用字法に復原することもできそうである。そうすると、原『元記』首部の素佐乃乎命神裔譜は、六世紀頃に成立した第一次系譜を、を和銅元年に当時通用の新しい仮名を取り入れつつ書写したものであるかもしれない。

これまで散漫ながら思いつきを述べてきたのであるが、九条家本・谷森本『元記』首部の素佐乃乎命神裔譜はすこぶる貴重な史料であることが少しは明らかになったのではないだろうか。今後、神話学の専門家の方々に広く活用され、更に深く究明していただきたいと思う。または沢・田中両氏がなされたような詳細な研究がこれからも続けられるべきであり、『元記』は一冊の注釈書を作るに値する価値を蔵するといっても過言ではあるまい。

最後に『元記』拝観の便宜を与えていただいた宮内庁書陵部の橋本義彦先生に厚く御礼申し上げたい。

昭和五十一年十月三十日